～株式投資で勝つ方法～　－エライ人の金言編－
その４　ウィリアム・オニールに学ぶ（全２回）

2005/07/15　太田寿一

第１回　要領よくできるやり方

ウィリアム・オニールは、わずか 30 歳でニューヨーク証券取引所の会員権を取得し、投資調査会社を経営するプロの機関投資家です。また、彼はあの「Wall Street Journal」に次いで支持を得ている「Investor's Business Daily」という投資専門紙を発刊しています。

彼は『ＣＡＮ－ＳＬＩＭ投資法』という独自の投資手法を編み出し、この方法を用いれば株価が数十～数百倍になる成長株を発掘することが出来る、と提唱しています。ＣＡＮ－ＳＬＩＭとは、

Ｃ ＝ Current Quarterly Earnings Per Share → **当期四半期の１株あたり利益**
Ａ ＝ Annual Earnings Increases → **年間の収益増加**
Ｎ ＝ New Products, New Management, New Highs → **新製品、新経営陣、新高値**
Ｓ ＝ Supply and Demand: Small Capitalization Plus Big Volume Demand → **株式の需要と供給**
Ｌ ＝ Leader or Laggard → **主導銘柄か、停滞銘柄か**
Ｉ ＝ Institutional Sponsorship → **機関投資家による保有**
Ｍ ＝ Market Direction → **株式市場の動向**

の略です。１つずつ説明していきましょう。

Ｃ：当期四半期の１株あたり利益

まず彼は、当期四半期における１株あたりの利益が、前年の同じ時期と比べて大きな伸び率を示している会社に注目します。少なくとも **20～50%以上**の大きな増加率を示していなければなりません。四半期（３ヶ月）という短い期間に注目することで、その株が本当の成長株かどうかを判断することが出来ます。特にここ最近で大きく収益が伸びた会社は近いうちに株価が急騰する可能性が高いと言えるでしょう。ここで注意しなければいけないのは、対前期比ではなく、対前年比で比べるということです。また、純粋に企業の成長を見極めるために、不動産や建物などの売却によって発生した特別利益（将来継続することのない利益）は除外して考えなければいけません。

Ａ：年間の収益増加

真の成長株とは、過去数年にわたり安定した成長率を維持しているだけでなく、この１年以内においても力強い収益を上げている会社のことです。この２つの条件を満たした銘柄は、**高成長を遂げる確率が高い**会社だといえます。特に過去４～５年にわたって、25～50%（複利）

以上の年間収益増加率を実現している企業を選ぶようにします。

Ｎ：新製品、新経営陣、新高値

高成長を遂げた企業の 95%以上は、**ヒットを産んだ新製品か新サービスを提供していた**か、**業界に好ましい変化があった**という共通点があります。また経営陣の交代（日産のような）も、株価上昇のシグナルの１つです。そして、株価が過去最高値を行ったり来たりして、そして上昇を始めたときに買うことで、大きな収益を上げることが出来ます。

Ｓ：株式の需要と供給

市場で流通している株が少ない企業の方が、大きな株価変動が起こる可能性があります。もしほかの条件が同じなら、**発行されている株式数が少ない会社**に投資したほうがいいでしょう。また、自社株買いによって流通している数が減っているのもよい傾向だといえます。

Ｌ：主導銘柄か、停滞銘柄か

会社は、**その業種を牽引している会社とそうでない会社**の２つに区別することが出来ます。特に上位２、３社の株は驚くほどの成長を遂げる可能性があります。有力産業の上位企業の株を買いましょう。

Ｉ：機関投資家による保有

多額の運用資産を持つ機関投資家が買いを入れることで、**株価は大きく値を上げる**ことが出来ます。機関投資家がまったく買っていない会社よりは、数社が買っている会社の株を買うとよいでしょう。一部の洗練された機関投資家が目をつけた株ということは、**将来高騰する可能性が高い**といえるからです。ただし、あまりにも彼らの保有率が高いと、供給過多で大きな収益を上げることは出来ないので注意しなければなりません。

Ｍ：株式市場の動向

同じ成長株でも、相場が強気のときと弱気のときでは成長する度合いはかなり違います。もちろん真の成長株は弱気（下げ）相場のときでも成長しますが、**強気（上げ）相場のときの方が大きく成長します**。そのためにマーケット全体の動向を分析することも重要です。また、マーケットがいつ天井に達したか、いつ底を打ったかにも注意しなければなりません。そうでないと得ることが出来るはずだった大魚を逃してしまいます。

参考文献　『オニールの成長株発掘法』（2001）
Ｗ・オニール（著）、竹内和巳・松本幸子・増沢和美（訳）、パンローリング